

ノーラー：伝説とパフォーマンスにみるその特質

岩澤 孝子

本論考は、タイ南部一体に分布する「ノーラー」という伝統芸能に着目し、芸能が社会にとって、どのような存在として認識されているかを民族誌の立場から探究するものである。ノーラーはタイ南部文化を象徴する伝統的娯楽芸能および儀礼実践として知られ、同時に一部のタイ知識人の間では、タイ古典舞踊劇のルーツとしても言及されていることから、その研究価値が認められていたにもかかわらず、先行研究の乏しい対象であった。この芸能は、それを眺める側の視点に応じて、異なる様相を示すが、始祖の時代から「旅芝居」をその主な形式としてきたために、常に両義的な存在と認知されてきた。本研究では、第一に、タイ古典舞踊劇史において、ノーラーがどのような位置にあるかを示す。古典舞踊劇の伝統は主に、タイ王室の位置するタイ中央部において発展したが、そのルーツはインドにあると言われる。ノーラーは元来インド人居留区であったタイ南部に発祥した。移住したインド人による旅芝居がもととなり、後のノーラー芸能発展につながったと考えられている。第二に、ノーラー伝説に登場する芸人の始祖たちについて南部人がいかに認識しているかを、祈禱歌の分析・解釈を通して明らかにする。ノーラーの伝説は、他の古典舞踊劇の起原神話とは異なり、インド神話の踏襲ではない。伝説には、ヒンドゥー諸神ではなく、ラーチャクルーと呼ばれる人間味溢れるキャラクターが登場し、彼らは人々から神ではなく、師匠として崇拜されてきた。第三に、芸人と聴衆からなる特異な集団構造について描きながら、ノーラーというパフォーマンスとそれを取り巻く人々の関係性について示す。第二・第三の観点において、ノーラー芸人は旅芸人であるが故に、聴衆から、アウトサイダーかつインサイダーという二重存在として認識されてきた。以上三つの視点と連関する「旅」のモチーフをもとに、ノーラーの両義的特質を明らかにした。